



こくろうよなご

第12号

2026年2月10日

発行責任者 倉下文明

編集 教宣部

つくろう職場に労働運動を！ ひろげよう闘いを 職場に、地域に、全国に！



運動なくして安全なし！

労組を超え、安全な職場づくりを誓う

伯備線事故から20年目となる1月24日、米子地方本部は「伯備線事故追悼の日」の行動を取り組んできました。

前号でも掲載したとおり、午前中は中央本部宮崎執行委員長より「効率化の特徴・分析と労働組合の（私たち）の役割」のテーマにて、講演を頂き、JR東日本発足後の効率化施策の変遷を中心にお話がされました。

負担感増す現場で

1987年代からの「業務委託と非正規雇用の拡大」、2000年代からは「業務委託の更なる深度化と連結決算方式によるグループ会社との一体化」、そして、2010年代からは「少子高齢化社会を背景とした、変革に名を借りた効率化の深度化・ジョブ型人事運用・総合処遇改善の導入」などについて、お話をされました。

存在意義を再確認

その中で、印象に残ったのは、東日本会社で行われている「今日は駅で仕事をし、明日は〇〇で仕事をして、果ては自動販売機のお菓子などの補充までする」というマルチタスクという働き方がされていることと、「何でも屋」という表現がされていましたが、それが果たして安全やサービスが維持出来るのか、疑問にも感じました。

西日本会社では、「何でも屋」と感じる働き方ではないものの、最近では統括駅が進む中で、駅社員が営業・運転以外の企画業務なども行うとしています。統括駅を見据えて、既に企画グループ等を作っている現場もあるようですが、本来業務に従事しながらであるため、負担感を感じる声もあるようです。間接部門が大幅に縮

小されたしわ寄せが現場に来ているようにも感じます。現場の負担が増えれば、それだけ安全やサービスレベルの維持が困難にもなります。安全最優先・サービスの向上を現場の努力に求めるのではなく、会社こそが責任をもって環境整備を図ってもらいたいものです。

りません。意識しないと忘れがちにもなりませんが、改めて労働組合の存在意義について確認出来たと思います。

何を大事するのか

また、宮崎委員長自身の職場の状況にも触れられていました。東日本会社では60歳を超えて再雇用になると多くの人はグループ内外を問わず、出向の扱いになるようです。宮崎委員長も例外ではなく、現在、グループ会社へ出向をされていますが、組合員が一人職場で3年間かけて「半休制度」を勝ち取ったといわれていました。

粘り強い取り組みにより大きな成果を上げられた一方、そのことで「職場の団結が広がったとの実感が湧かない」とも言われていました。先ほど団体交渉のこの書きでしたが、要

求が思うように前進しないことに無力感のよなものを感じることもあるかもしれません。しかしながら、要求が前進するかしないかは、労使の力関係によるものでもあります。つまり団体交渉に向けた議論や調査、そして、交渉でのやり取りなど、一連の取り組みを通じた団結の広がりこそが大きな成果であると言えます。

運動なくして安全な職場を作ることは出来ません。「私たちは何を大事にして、運動を進めるのか」改めて認識させられる講演となりました。

講演後は、職能別協議会を代表して、運輸協の山田議長より「特急列車のワンマン運転の問題」、工務職協の中原組合員からは「保線管理室の統廃合の問題」などについて、

市側からは「JRからは持続的運営のためとの説明があった」「サービス低下を招かない対応への配慮をJRへ要請した」などの回答がありました。

その他、駅舎改修への要望や三江線代替交通維持についてなど、質問頂きました。5月には、江津市議

市の玄関口が無人駅でいいのか！

江津市12月議会にて、国労議員団の植田好雄議員に、4月実施の江津駅巡回対応駅について取り上げて頂いて頂きます。「市の玄関口の無人駅が街づくりにも大きく影響する」「地方創生とは真逆ではないか」として、JRに見直しを求めるべきとの質疑に対して、

市側からは「JRからは持続的運営のためとの説明があった」「サービス低下を招かない対応への配慮をJRへ要請した」などの回答がありました。

その他、駅舎改修への要望や三江線代替交通維持についてなど、質問頂きました。5月には、江津市議



献花する宮崎委員長



会選挙もあります。引き続き、議会で活躍頂けるようしっかりと取り組みましょう。

午後からは、事故の発生時刻である13時18分に合わせて、西労組米子地方本部と合同による「献花式」を執り行い、「事故でお亡くなりになった3名の御霊に哀悼の誠を捧げ、事故の教訓を継承し、2度と悲しい事故を繰り返さない」ことを誓いあつてきました。